

肝試しにでかけたのは新月の晩だった。

「弱虫泣き虫春虎チユンフーやあい」

「弱虫じゃないよ、一人で厠にだつて行ける」

「嘘こけ、こないだ厠に行こうとして我慢できず漏らしちまつたくせに」

「あ、あれは仕方なく……」

「怖がり泣き虫春虎め、寄るなさわるな臆病が伝染る」

「なよなよくねくねべそつかき、女みてえに科つくる」

「色も生つ白いし瘦せつぼちだし、目ばつかでかくて女みてえ」

「お前みてえなのを女が腐つたようなやつて言うんだな」

「遊郭に引き取つてもらつたほうが稼げたんじゃないか」

「ばかにするな、僕は怖がりなんかじゃない！」

「じゃあ証明してみろ」

「証明？」

「屋敷の裏敷に古い古い廟がある」

「当主さまのご先祖が昔々悪いものを封じ込めた場所だ」

「絶対近寄つちやいけないうて言われてる……？」

「そこに夜ひとりで行つて廟に蝋燭をおいてこい」

「いやだ、できない！」

「ほら見ろ、やつぱり口だけじゃないか！ 春虎は怖がり

泣き虫臆病者だ、こんなやつが俺たちの仲間だなんて恥ずかしい！」

「もし本当に魔物がでたら……」

「言い訳か？ かつこ悪ー」

「弱虫じゃねえつて証明したいなら今晚蝋燭もつて一人で行つて来い、そうすりゃ一人前だつて認めてやるよ」

「弱虫泣き虫春虎を仲間に入れてやる」

屋敷の裏手の藪、そこに存在する廃廟に蝋燭を灯してくる。言葉にすればたつたそれだけ、言うは易し行うは難し。

出立間もないというのに春虎の顔はすっかり青ざめている。勇敢さを示す行為と口々にけしかけた朋輩も、本心では春虎が怯える様を見たがつてるだけだ。

下劣な企みがわかつているからこそ、見返してやりたい。見事やり遂げて帰還してやる。

闇には魔物が巢食う故、夜はみだりに出歩いてはならぬ。

新月の晩はとくに陰気が高まり、人ならざるものどもの動きが盛んになる。

蝋燭が儂く揺れ、薄紙に陰影の濃淡を投じる。

「この家の……だ……」

「？」

空耳かと疑う。

風の音に紛れて途切れ途切れに届く声は醜悪にひび割れて、陰惨な響きを帯びていた。

冥府の底から沸き出ずるかのような陰々滅々とした呪詛。かそけき揺れる蠟燭の炎を前に、おそろおそろ回廊をそれ、剥き出しの地面を踏む。

風の音に紛れたあやしの声は屋敷の裏手に生い茂る藪から聞こえてきた。

僕は臆病者なんかじゃない。

自分に言い聞かせさらに一歩、もう一歩。

話し手の正体をこの目で見極めてやる。

朋輩らの野次を思い返し、鬱勃と闘志が湧く。

春虎だつて男だ。

弱虫、臆病者と蔑まれるのがわかつていながらおめおめ引き下がれない。

大丈夫、物陰からそつとうかがうだけだ。

大丈夫、ばれるはずない……

こみ上げる恐怖と怯情を押し殺し、虚勢で顔を引き締め、裏手に回る。

風の生臭さが一層増す。

瘴気を孕む風が春虎に頬をなぶり髪にじゃれ、渦を巻いて去っていく。

「この家のあるじはけしからん」

「代替わりしてからワシらへの供物も蔑ろになって」

「業腹だねえ。崇つてやろうかねえ」

「悪い風を起こして屋根を吹っ飛ばしてやろうか」

話し手は人ではなさそうだ。

どうやら春虎が仕える主の人となりを見痴っているらしい。さもありません春虎が仕える商家は代々続く由緒ある家柄だが、当代の主人は跡取り娘に見初められた成り上がり者の俗物にすぎず、現世利益を追求するあまり、祭事を軽んじる傾向があった。

当代の主人に代わつてから敷地の祠は管理が疎かになり寂れる一方、近在の民の信心は廃れる一方。

それ故加護が衰え、土地に封じられた悪しきものたちが胎動を始めてもおかしくはない。

妄想逞しく春虎は震え上がった。

拮抗する陰陽の気のうち片方に傾けば均衡が崩れ、亀裂からよくないものが噴き出すのは世のことわり。

春虎の気も知らずひそひそ声は続ける。

「奴やつこさんも外へ出たがってる」

「だろうなあ、百年たつもんなあ」

奴さん？

「埃臭えあばら家に閉じ込められて、さぞかし腹あ立ててるだろうさ」

「自業自得だろう、ちよいとばかり悪さのしすぎだ」

「けども人の手え借りねえとさすがに破れんだろう」

「結界が……」

結界。

裏敷に結界らしい建物といえ、消去法で廟しか思い浮かばない。

「……………!」

冗談じゃない。

むぎむぎ廟に行ったら飛んで火にいる夏の虫だ。

混乱を来たし、とにかく屋敷のほうへ戻ろうと手探りで歩みだす。

破邪符など持つてない、魔を追い払う力などない、春虎は無力で無知な子供で地面に転んだところを襲われればひとまりもなく獲つて食われるのがおちだ……

逃げる最中に転ぶ、即座に立ち上がり一目散に駆け出す、肘振り足蹴り出し頭を屈めひた走る、もう肝試しなんてどうでもいいのこのこ来たのが間違いだつた屋敷に帰りたい、風の沸いた布団が恋しい朋輩の軀がうるさい相部屋に帰りたい一念で懸命に突つ走る……

「!! あつ、」

斜めに視界が傾ぐ。

帰りたいと気がせくあまり注意がおろそかになり同じ蹴つ躓く、地面を滑つて肘を擦り剥く、黴臭く湿つた土の匂いが鼻腔にもぐりこむ。

手をすり抜けた蠟燭を慌てて掴む。

奇跡的に消えてない。

蠟燭を取り戻し、袖を汚す土を払つて立ち上がった春虎は、眼前を塞ぐ威容に息を呑む。

廢墟の廟があった。

おそらく、朋輩たちが言っていた場所だ。

意匠を凝らした梁や柱も今はすっかり塗料が落魄し、風雨に晒されるがまま骨格はささくれ老朽化し、古色蒼然と神威の枯れ果てた外観を呈す。

帰りたい。

否、ここまで来たのだ。

弱気と勝気がせめぎあい、葛藤していると生臭い風が吹き、心許なく蠟燭が揺れる。

唯一の光源を失つてはなるまいと、春虎は何も考えず廟に踏み込んだ。

辛うじて雨風を凌ぐ屋根と壁がある分、外にいるよりは蠟燭が長持ちする。真つ暗闇の中、藪を抜けて屋敷に帰る心細さを思えば、目の前の廟に飛び込む方がマシだった。

瘴気、または邪気と名付けてもいいような不浄凝る廟の奥へ、蠟燭を翳しおそるおそる進んでいく。

「怖くなんかない……怖くなんか……」

笑われっぱなしでいいのか、春虎。

見返したくないのか。

くじけそうな心を鼓舞し、湿気を吸って膨張した床を体重で撓ませ、忍び足で奥へと進む。

内部は荒廃した伽藍だった。

朽ちた床板には埃が積もり、柱の間に蜘蛛の巣が張っている。

もう何十年と人が詣でた痕跡のない、空虚な堂だ。

軋む床を爪先で探り、何本の柱を経て梁をくぐり、遂に嘗て祈禱が行われていた奥の間に到達。

「蠟燭を置いておしまいだ……」

安堵は油断に繋がる。

その一瞬、無防備にも笑みを浮かべ蠟燭を掲げた春虎は、壇の後ろの掛け軸に気付く。

「!! ひいあああつ、」

口から迸る絶叫。

蠟燭の火がふつと消え、視界に帳が落ちる。

祈禱壇の後ろに掲げられた一枚の掛け軸。

そこに描かれていたのは世にも恐ろしく醜悪な異形の姿。

どう表現すればいいのか。

ろくろく読み書きもできぬ無学で幼い春虎は自分が見たも

のを正確に言葉にする術を持たない。

ただひたすらに醜悪、ただひたすらに邪悪、ただひたすらに……

掛け軸に描かれた異形の者は本来目がない場所に目を持ち、鼻がない場所に鼻を持ち、その面相は絶対悪の権化の如く筆舌尽くしがたく怪奇千万。

昼の光の中で正視すれば気死しかねぬ禍々しさに充ち満ちて、およそ正常な神経の持ち主ならば戦慄を禁じ得ない。

たかが絵、されど絵。

廃廟に飾られた絵に驚倒した春虎は、蠟燭が消えた事によって完全に動転し、おまけに腰が抜け、出口を求めて床を這いずる。

文字通り、暗中模索の堂々巡り。

「ひっ、ひっ、ひ……ごめんなさい、罰当たりでした、もうしません、廟を荒らしてごめんなさい……」

「いや、許せねえな」

「！」

凄まじい勢いで顔を上げる。

廟内に殷々と何者かの声が響く。

「罰としてガキ、俺を逃がす手伝いをしろ」

「だれですか？」

「誰だつて？　しやらくせえ！」

酒場でくだ巻く無頼漢さながら伝法な啖呵を切り、けらけら笑いのめす。

そこらじゅうで物音が立ち、柱と床板がみしりと軋む。

「ば、化け物……」

「おうとも、化け物だ！」

あちこちを殴り付けて回る音がやみ、春虎の鼻先に渦を巻いて埃が乱舞。

「おもての雑魚どもが言つてたろ？　いくら血の巡りの鈍いガキだつて危険な場所には危険なものがあるつて察しがつくだろ」

「廟に閉じ込められてるつていう……」

「鬼神ちゃんだ」

あつけらかんと宣言。

竜巻を纏つた何者かはすこぶる上機嫌に続ける。

「陰気が高まる新月の晩、復活にやお誂え向きだ。百年かかってようやくここまで力を取り戻した、が、限界だ！　だめ、むり、お手上げ、降参！　おいガキ、そこに貼つてある札が見えんだろ？」

目を瞑りたい衝動に抗い、やつとの思いで眼球から瞼をひっぺがし、示された方角を向く。

「アイツをとれ」

「できません」

即答。

鬼神は激怒する。

鈍い音が連続し衝撃波が炸裂、天井床壁に自暴自棄の無軌道さで力の塊が衝突して撓む、痲癩の暴発に両耳を塞ぎしやがみこむ。

「できませんってな何だクソガキ、俺は百年もおんぼろ廟でひとが通りかかんの待つてたんだぞ、数十年ぶりにやってきた人間だ、うんと言うまで返すもんか！」

「だ……だつて、悪いものなんでしょ。さつき他の魔物たちが言つてた、悪さのしすぎで封印されたつて……解き放せば悪さを働く、お屋敷の人たちを困らせる、旦那様に仕返すする！」

「はッ、俺あそんな度量の小せえ男じゃねえぜ！ だいいちとつくに代替わりしてんだろうが、俺を廟にぶちこんだヤツは憎いが子孫にまで恨みはねえ」

「駄目、だめです！ 悪いことしたから百年も閉じ込められてるんだろ、人を崇つて死なせて作物枯らして……悪い病をまきちらして……お前は悪い魔物だ、外にでちゃいけないんだ、永遠にここにいろ！」

コイツを解き放せばたくさんの人が不幸になる。

ありつたけの勇氣を振り絞つて怒鳴れば、唐突に騒音が病んで廟に静寂が戻る。

しばらくして聞こえてきたのは、しおらしい嗚咽。

春虎は大いに当惑。

「……………泣いてるの？」

どうして？

凄い力をもつてる、凄いい魔物なのに。

「悔い改めてやり直そうとしてる俺様を黴くせえ、埃つぼい、こんな廃屋に永遠に縛り付けようつてか。人間はくせに血も涙もねえ」

「あの」

「下外道当主め、いつそ殺しやよかつたんだ、これじゃ生殺しだ。じめじめ薄暗い闇中に閉じ込められて話し相手もねえ、百年前は自由に空を飛び回つてた俺様が今じゃこのザマ、床下のネズミにだつてシカトされる始末」

よよと泣き崩れる。

まるで自分が泣かせてしまったみたいなの悪さ。

「誰も彼もが悪党つて決め付ける、改心したつて訴えても信じてくれねえ」

「改心したの……?」

「百年も廟にぶちこまれたんだぜ、いやでも改心するさ! 今じゃこのとおりすっかり心を入れ替えて……そうだ、取り引きしようや」

名案を閃いたと嬉々として。

「身なりから察するにお前、下働きだろ。毎日毎日牛馬みてえにこき使われてんだろ。封印解いてくれたら家来になって恩返ししてやる。貢献するぜ俺さまは」

「信じられない……改心したって証拠を見せてよ」

「経でも唱えりやいいのか?」

「僕一人じゃ決められない……旦那様に相談しないと」

春虎のすぐ後ろで轟音が炸裂。

反射的に凍り付く。

「わっかんねえかなあ、んなことしたら丸損だ。お前の家来になつてやるつて言つてんだぜ? 旦那様なんぞ担ぎ出したらせつかくのうまい話がパアだぜ? 千載一遇の好機を棒に振るのか」

鼓膜をざらり舐め上げる声のいやらしさに鳥肌が広がる。

「俺が付いてりや百人力だ、どんな辛え仕事だつて一瞬で終わらしてやる、人間どもが崇め奉る鬼神サマだからな」

「でも……」

「煮えきらねえ奴だなあ」

舌打ちの後ははあんとひとり合点。

「こんな夜更けにガキが廟に迷い込むとは面妖だともつていたが、なるほどね、朋輩にいじめられたんだな」

「なんでわかるの!？」

「そのべそべそした性格みてりやわかるさ。大方みそつかす扱いで相手にされてないんだろ、朋輩を見返したくて出かけたはいいがすっかりぶるつちまつて……足腰震えてるぜ、ざまあねえな」

「うるさい!」

「臆病者」

「ちがう!」

鬼神は飄けて哄笑する。

どこからか巻き起こる哄笑に被せて暴風が荒れ狂い、掛け軸の裾が激しくはためく。

「運命を変えたくねえか、ガキ」